

氏名	趙 宰瑩
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第 39 号
学位授与年月日	令和 6 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
題目	学位論文題目 韓国と日本の陶磁器産業とデザインに関する研究 － 近現代を中心に －
	研究作品題目 作品番号 1. 「Omok series - 飯床器セット」 作品番号 2. 「Omok series - くぼみ皿」 作品番号 3. 「Omok series - 角平皿」 作品番号 4. 「Omok series - 楕円平皿」 作品番号 5. 「Omok series - 長皿」
論文審査委員	主 査 教 授 長井 千春 副 査 教 授 梅本 孝征 副 査 教 授 佐藤 直樹 外 部 柳宗理記念デザイン研究所 審査委員 元所長 森 仁史

1 学位論文の要旨

人々の暮らしと密接な繋がりを持つ食器は、各国独自の文化を最も特徴的に表している。朝鮮文化は大韓帝国の消滅と日本統治時代を経て、多くの特徴を失い、現代では西欧の美的様式が日常化している。しかし韓国文化が世界で注目される現在、食の器としての陶磁器に韓国独自の美意識を再認識し、その陶磁器デザインと生活文化を世界に発信する必要性を感じている。

本研究では近現代韓国と日本の陶磁器産業の発展に関する調査を通じて、日本統治下における近代朝鮮の手工芸文化での陶磁器製作方式から量産体制への変遷、現代の韓国陶磁器産業の発展までの経緯を調査し考察する。さらに、韓国と日本の食文化として比較考察及び時代別の食器分類を通じて、現在の韓国人の嗜好に現れた陶磁器デザインに対する特徴と問題点を調べる。また、上記に挙げた調査研究を通じて、現代韓国の食生活にふさわしい陶磁器デザインを提案する。特に、韓国で伝統的に継承されてきた食文化に適する食器サイズを規格化し、韓国の陶磁器産業や食文化、陶磁器デザイン研究の基礎資料となることを目指している。

第 1 章では、研究の背景と目的から、世界の陶磁器市場における現代韓国陶磁器産業の現況を考察する。韓国の食文化の本質的な要素と特性を盛り込んだ陶磁器デザイン研究の可能性と必要性を明らかにし、研究の範囲を確認した後、その方法を記した。

第 2 章では、朝鮮時代以前と官窯体制の陶磁器生産と朝鮮白磁の誕生について説明する。第 2 節では朝鮮時代後期の開港による近代化過程で外国陶磁器の流入とその結果としての分院官窯の民営化過程を明らかにする。日本の間接的な支配を受けた大韓帝国時代と直接的な支配を受けた植民地朝鮮時代での、日本による陶磁器技術教育と日本人資本家によ

る陶磁器産業が発達した経緯を論述する。特に、日本硬質陶器株式会社の朝鮮工場設立により、朝鮮の近代的な陶磁器産業が本格的に始まり、現代韓国陶磁器産業の胎動となった経緯を明らかにする。第3節の現代（大韓民国）では（1940年代～1950年代）、韓国陶磁器産業の胎動期（1960年代～1980年代）、韓国陶磁器産業の成長期（1990年代～2010年代）、外国産陶磁器の競争の中で停滞期（2020～現在）、韓国陶磁器産業の再飛躍の時期に分けて時代別に考察し、陶磁器デザインを中心として論述する。また、現在の韓国陶磁器産業の現状を分析、問題点を考察する。

第3章では、第1節の「韓国の食文化と変遷」で、朝鮮時代の伝統的な食文化から近代の外国の文化と文物が流入した経緯について述べる。朝鮮戦争後の現代から韓国と西洋の融合した食文化へと時代別に変化していく食文化と韓国食器について考察し、現代の韓国食文化について考察する。第2節の「韓国の食器」では、韓国食器と日本食器の比較から韓国食器の特徴を導き出し、その構成と特徴を明らかにする。また、現代の韓国食器の現状を見ながら、韓国陶磁食器の問題点を考察する。

第4章では、第1章から第3章までの歴史的、文化的考察の理論研究を基に、韓国陶磁器の基礎的な研究が不足していることを確認し、現代の韓国陶磁器の規格を導き出し、その構成と用語を説明した。また、韓国の食文化と食事作法の特徴を導き出し、デザインで作品に反映させることにした。製作方法としては2章の研究結果から陶磁食器の量産に適した技法としての水ゴテ成形と圧力鋳込み成形の可能性を提示した。

「デザイン提案」では、本研究の考察過程で得られた結果を基に、韓国の陶磁食器が近代で消失した韓国らしさを取り戻すための努力と現代韓国食文化に対する理解に基づき、実用性のある美を備えた素朴なフォルムの韓国食器「Omokseries（オモクシリーズ）」を提案する。Omok（オモク）は韓国語で「くぼみ」という意味で「オモクシリーズ」では、韓国食器セットである「Omok series-飯床器セット、9点」、「Omok series - くぼみ皿、4点」、「Omok series - 角平皿、5点」、「Omok series - 楕円平皿、4点」、「Omok series - 長皿、3点」のデザイン製作を試みた。また、本研究をより簡単に説明するために、韓国と日本の食文化、陶磁食器に関する資料を作成し説明した。

第5章では本研究を総括し結論と今後の課題と感想を述べた。韓国食器の潜在的な美意識を振り返りながら、「韓流」「韓食」にならびうる現代的な韓国陶磁食器を提案し、外国産陶磁器との競争のなかで本研究は現在停滞傾向にある韓国陶磁器産業の再飛躍に寄与したい。さらに本研究の今後の課題として、韓国の陶磁器産業と陶磁器デザイナー、作家たちが韓国の食文化と食器の本質的な要素を踏まえたデザインの提案を通じて、歴史的な韓国陶磁に次ぐ現代陶磁器デザインの活躍を期待して、本編のまとめとした。

2 学位論文審査の要旨

趙宰瑩の「韓国と日本の陶磁器産業とデザインに関する研究— 近現代を中心に —」は、近現代の韓国陶磁器産業と陶磁器デザインの誕生から発展までの歴史的変遷を概観することで、朝鮮時代の手工芸的陶磁器制作方式から量産体制への移行、陶磁器産業の進展と衰退が現代韓国の食器文化にもたらした影響を読み解き、また、韓日両国の食器デザインの文化的な相違について比較考察することで得られた知見から、伝統的に継承されてきた食文化に対応した韓国独自の食器の在り方について検証し、現代生活にふさわしい食器の規格

提案と陶磁器デザインの創作を目的としている。

【論文】

論文は5章で構成されており、序論となる第1章では研究の概要、背景と目的、範囲と方法が述べられ、第2章では韓国の陶磁器産業通史として、朝鮮時代前史から大韓帝国時代、植民地朝鮮時代にかけて日本統治下で発展した窯業技術の近代化と陶磁器産業成立のプロセス、そしてその過程で喪失した朝鮮人主導の近代化と陶磁文化について概観している。さらに植民地支配解放後から現在までの韓国陶磁器産業の進展と陶磁器デザインの変遷を丁寧に辿りながら考察を加えている。かつて、高麗青磁や白磁等、独自の陶磁文化が栄えた朝鮮は、1876年の開国後に流入した日本製量産陶磁器や製陶技術、工業伝習所による工芸と窯業教育の導入で、陶磁器産業の基盤が急激に形成されていった。同章では日本の植民地政策のもと、朝鮮の地理的利便性から原料調達と陶磁器製造のアジア拠点とするために設置された中央試験所と同所で実施された原料調査や窯業試験、教育について検証されている。さらに、日本硬質陶器(ニッコー)社が朝鮮の釜山に設置した支社工場や、1930年以降設立され杏南(ヘンナム)社、忠北(チュンブク)社など、現在の韓国陶磁器産業の基盤を築いた製陶会社について、日本と韓国で収集した資料を駆使しながら史実を検証している。

第3章では、韓国の食文化の歴史的な変遷と食器の特徴について分析し考察を加えている。朝鮮では儒教の定着に伴い、食生活においても礼法や様々な原則、様式が規範化され、食器も「飯床器」として定型化されていった。しかし、急激な近代化の過程で、朝鮮独自の食器文化は失われ、民間では日本の量産食器がそれにとって変わり、王室では西洋式食文化が導入され洋食器が使用された。日本統治下の朝鮮で浅川巧が執筆した『朝鮮陶磁名考』に記載された食器の名称とサイズは、現代の韓国において伝統的に継承された朝鮮食器の唯一の記録であることを論証している。また、韓国と日本の食文化と食器食具について比較考察することで韓国の食文化の伝統と独自性を確認し、その根拠を論理的に構築しながら第4章の韓国の現代生活にふさわしい陶磁器デザイン提案で継承することを目指している。第4章では、第3章で論述した韓国の食文化に関する考察から、デザイン提案のために韓国食器の規格について系統的な整理を試みると共に、現代韓国の陶磁生産者の大半を占める小規模工房や作家に向けて、少量多品種の陶磁製造工程にふさわしい量産技法として、圧力鋳込み成形と水ゴテろくろ成形に着目し、デザイン提案と陶磁器デザイン創作を提示している。

【作品】

第3章の韓国の食文化に関する調査研究を通じて、韓国基本の食具スプーンに適するフォルム、食材の色を妨げない陰陽五行思想に基づく淡い5色の韓国食器「Omok series (オモクシリーズ)」を提案した。Omok(オモク)は韓国語で「くぼみ」を意味し、韓国食器:飯床器セット、くぼみ皿、角平皿、楕円平皿、長皿の陶磁器デザイン創作である。《作品番号1.「Omok series - 飯床器セット」》の構成は、小型飯碗、飯碗、汁碗、麵鉢、湯呑の5品目からなり、少量のご飯を食べる現代の食習慣から小型飯碗を、また料理の保温性を重視する韓国の食文化の特性から、取り皿にもなる蓋付き食器を提案している。韓国では器の縁が割れたり、ヒビが入ると福が逃げるという考え方があり、安定感のある縁デザインを取り入れた。

《作品番号 2. 「Omok series - くぼみ皿」》は、韓国の代表的な料理キムチやナムルのための 4 サイズの皿である。《作品番号 3. 「Omok series - 角平皿」》は、食事ごとの料理品目が多い韓国の食卓で、合理的に食器を配置できるようデザインした角形の皿である。現代の韓国では、給食でワンプレートや仕切り皿が多用されており、需要の多いフォルムである。《作品番号 4. 「Omok series - 楕円平皿」》の楕円形の皿は、様々な料理に活用し易く、大きさと高さが異なる 4 サイズで構成されている。《作品番号 5. 「Omok series - 長皿」》は、魚料理や韓国の海苔巻きであるキンパプのために提案され、大きさと高さが異なる 3 サイズ 3 色展開のデザインである。

【口頭発表】

口頭発表では、研究要旨の説明と論文各章の解説を口述した。近現代韓国の陶磁器産業史と陶磁器デザインの誕生と発展の経緯を概観する第 1 章から第 2 章では、収集した画像資料を活かしながらを明快に説明し、韓国食文化と食器について述べた第 3 章、創作研究について論理的に解説した第 4 章を含め、論文各章の役割が整合性を持って説明され、創作研究へ至るプロセスや技法、造形についても、調査研究と関連付けながら口述された。

以上のように、趙宰瑩はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

論文、作品、口頭発表等に基づき、口頭試問等を実施した結果は以下の通りである。

本研究で趙宰瑩が示した優れた業績は、まずこれまで検証が困難であった日本統治時代を含む韓国の近代陶磁器産業史を丁寧に紐解き、食器デザインと共にその歴史的な変遷と位置づけを検証したことである。さらに、日韓の資料調査を通じて戦後消失された韓国食器のモジュールを再構築し、新たな規格を提案し、その規格に則った陶磁器デザインの創作を挙げることができる。そして特筆すべきは、現在の韓国陶磁器製造者の九割を占める小規模工房や作家に向けた少量産製造技法の選定と推奨である。韓国と日本は、不幸な植民地支配関係を経ながらも急激な高度成長期を共に経験し、陶磁器産業が成長と発展を遂げた。しかし、両国の陶磁器製造の勢いは失われ、かつてのような大量生産技術を必要としないのが現状である。19 世紀以降、窯業技術の発展途上で誕生した水ゴテろくろ成形技法は現在日本各地の陶磁産地でも忘却されつつあるが、その技術に再注目し、自ら産地に赴き修得し本研究の創作と提案に活かした点である。

それは、趙宰瑩がデザイン提案から焼成した完成品まで、全ての工程を自ら実践し提示することが可能な陶磁デザイナーならではの力量として、その独自性を高く評価することができる。

最終試験において、趙宰瑩は論文においては資料を博搜した広い視野を持って検証と考察を進め、整合性のある論理展開のもとで独創的な結論を導き出した。創作研究では現代韓国の生活に相応しいオリジナリティーのある陶磁器デザイン制作と韓国食器に規格を提案し、作品として高い完成度を示した。論文作品共に非常に高く評価できることを審査員全員で確認した。この成績は、博士の学位を与えるに十分であった。